

## ハーン生誕150年記念企画 (1)

# ハーンとスペンサー

里見 繁美

今年、西暦2000年はラフカディオ・ハーン（小泉八雲 1850-1904）の生誕150年にあたり、世界各国でさまざまな記念的行事が催されますが、その記念する年に本館報でもハーンの小特集を組むことになりました。以下、第一稿です。

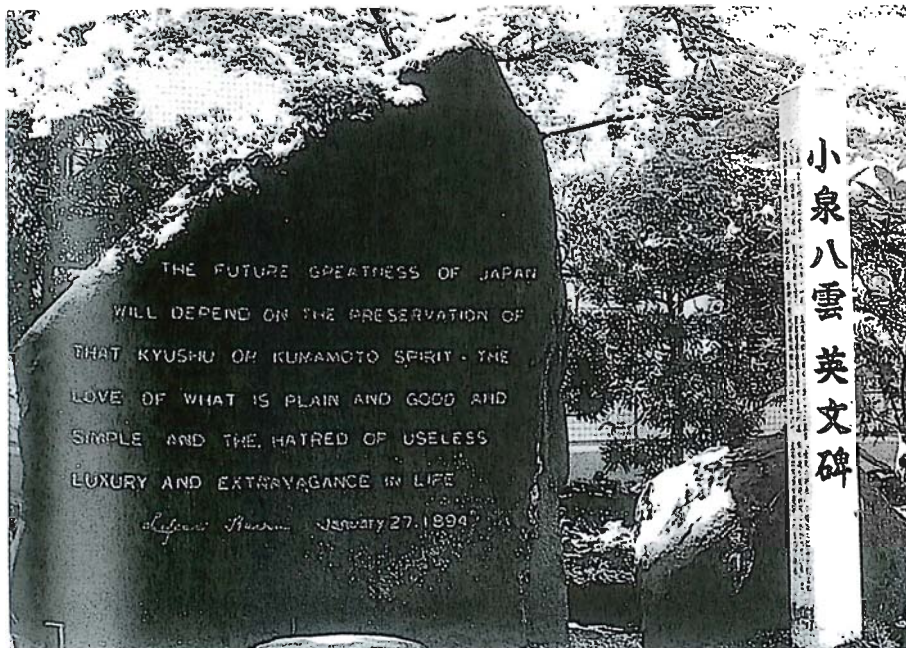
熊本大学のキャンパス内、あるいは周辺には、ラフカディオ・ハーンにゆかりのものが多く見受けられます。五高在職3年間というのは決して短い期間ではないから、当然といえば当然かもしれません。

先ず、小峰墓地にある石仏「鼻かけ地藏」はもっともよく知られたものでしょう。この石仏は鼻がかけているところから、ハーンは自分自身をそれに投影させて、お互いに身体の不自由さを慰め合っていたのではないのでしょうか。熊本において、彼が息抜きできた数少ない場所の一つでもあったわけです。

小峰墓地以外にもハーンゆかりのものはありますが、こうしたゆかりのものの中で、私たち熊本大学に身を置く者がもっと注目しなければならないものは、体育館横にある、おむすび型の石で作られたハーンの記念碑です。彼の五高における講演の、この最後の部分はよく引用されます。ある小料理屋さんでは、この部分を紙に印刷してお客さんの前にどうしようと提示していました。また熊本のある会社で

は、その運営方針を著した冊子の最後のところに、まさにこの部分を引用していました。さらに、熊本県の知事を経験され、首相まで経験された方がこの部分の一部を引用されたことは、私たちの記憶にまだ新しいことでしょう。そうした意味においては、よく知られた部分なのかもしれません。文言をよく吟味してみると、確かに魅力的なものを多く持っていると言えます。それでは、ハーン自身にとっては、あの主張のような生活が送れたのかといえますと、実は送れなかったのです。熊本での食生活、ライフ・スタイルを見てみれば、それは一目瞭然です。では何故、自分にはできないあのような主張を、五高の学生・職員にしたのでしょうか。種明かしをしますと、ハーバート・スペンサーの彼への思想的影響ということなのです。

1885年頃、アメリカのニューオーリンズにおいて、スペンサーを知って以来、完全にハーンは彼に「洗脳」されてゆきます。これはハーンにのみ起こった現象というわけではなく、ご存じの通り、アメリカにおいても、また日本においてさえも、スペンサーは驚異的な影響力を振るったわけです。明治の頃の知識人たち——森有礼、金子堅太郎等——が日本の新たな建国について、スペンサーから意見をうかがったり、あるいは直接会いに行き相談したりし



体育館横に佇むハーンの記念碑

THE FUTURE GREATNESS OF JAPAN WILL DEPEND ON THE PRESERVATION OF THAT KYUSHU OR KUMAMOTO SPIRIT, - THE LOVE OF WHAT IS PLAIN AND GOOD AND SIMPLE, AND THE HATRED OF USELESS LUXURY AND EXTRAVAGANCE IN LIFE.

Lafcadio Hearn January 27, 1894

ている事実を知れば、その影響の程度が日本においても伺い知ることができます。いずれにしても、このようにスペンサーから非常に強大な思想的影響を受けたハーンは、彼の考え方にのめり込んでいくのです。そして中でも、とりわけ「適者生存」を中心とした進化論思想の考え方が、この五高での講演を行う時に、ハーンの脳裏の中核を占有していました。自分自身にはできないことでも日本人にはできる生き残り戦術を、彼らに伝授したのです。つまりどういうことかと言いますと、全世界が、食料等を含めて、生き残るためのサヴァイヴァル戦争に突入したときに、日本人のライフスタイルのように、同じ事を成し遂げるにしても、非常に安価な生活で済む形態を維持してゆけば、他国に迷惑をかけず、必ずや生き残ってゆけるという主張です。ですから、このハーンの五高での講演は、一言で言うと、彼が日本においてあるいは熊本において観察したものに対して、スペンサー理論を適用してまとめた講演という見方ができるわけです。つまりハーンの観察とスペンサー理論の合体ということです。あの碑はその象徴なのです。「バブルの時代」を経験しますと、なお

さら彼の言葉が痛烈に響いてきますが、その背後にはスペンサーという彼にとっての「神様」が控えていたのです。このことは彼の記念碑のみならず、熊本を舞台にした作品、たとえば「柔術」や「九州の学生とともに」にいたっても共通して言えることです。これらの作品には至る所にスペンサーの顔が登場してきます。

一度、スペンサーに注目して、これらの作品を読むことをお薦めしたいと思います。

なお、本学附属図書館では、ハーン著作の初版本等を収集した「八雲文庫」はじめ、ハーン関係のコレクションが充実しており、100年前のハーンの作品を直に手にすることが可能です。図書館に足を運んで、是非一度ご覧下さい。

(さとみ しげみ 文学部助教授)

\*八雲文庫、ラフカディオ・ハーン・コレクションは、中央館の貴重書庫に別置しています。ご覧になりたい方は、カウンターにてご相談ください。

## 平成11年度特殊資料展・公開講演会を終えて

附属図書館では、平成11年10月30日(土)～11月1日(月)までの3日間、大学祭《熊粹祭》にあわせて特殊資料展を開催しました。今年で16回目を迎えた今回の資料展は、1637年(寛永14年)キリシタンへの棄教の強制と厳しい年貢の取りたてに抗議して、農民が天草四郎(益田時貞)を首領に大規模な一揆をおこした「天草・島原の乱」をテーマに附属図書館が所蔵している永青文庫(細川家文書)及び松井文庫から絵図、文書など45点が展示されました。「天草・島原の乱」に関する史料は、他大名家とは比較にならないほどの質量であり、天草四郎関係の史料も独占しているといわれています。なかでも、原城にたてこもった農民約3万7千名の一揆勢と、幕府軍12万との攻防戦を描いた絵図「有馬城攻図」、また「四郎家」に相当する一角に、その存在を意識し

たような描きかたをしているきわめて精巧な「肥前国有馬城之絵図」をはじめ数多くの貴重史料の展示に、約350名の見学者は時間をかけて熱心に見入っていました。

また、10月31日(日)には、吉村豊雄文学部教授による「細川家と天草四郎」と題した公開講演会が開催されました。講演では「天草・島原の乱」に際していわば情報センターとなった細川家の関係史料等をもとに、一揆勢の「総大将」とされる天草四郎の実像に迫り、反乱の主人公でありながら、最後までその姿を現わさず幻のように消え失せてしまった四郎は、実際には存在しなかったのではないかとの仮説が展開され、一般市民など約100名の参加者からは大変面白かったとの感想が数多く寄せられていました。